

副島隆彦著「大災害から復活する日本」徳間書店 2011年6月30日刊を読む

1. 大事件の時に誰も責任を取らないですむという奇妙な国家体制に日本はなってしまうている。このことがよくない。66年前の第二次世界大戦の敗戦の時にも同じことがあった。誰一人として、責任を取ろうとしなかった。ただ東条英機首相たち7人の軍人だけが、極東軍事裁判で、占領者アメリカの力で、無理やり有罪、戦争犯罪者ということで首を吊られた。
2. 日本国民の側からは何もそういう議論は出なかった。あの時、自分たちで責任を追及できない、だらしのない民族になった。その原因は、やっぱりアメリカが日本人を洗脳して実質支配しているからだ。優れた民族指導者(国民政治家、たとえば田名角栄のような)がなかなか出て来られないようにさせられているからだ。国民が自らの政府を自らの意思で作っていないからである。
3. 官僚という目に見えない、訳の分からない人間たちや東大教授の中の悪い連中は、自分の出世しか考えない。いっぱい裏金をもらって腐敗の限りを尽くしている。日本の官僚や御用学者たちが実質的にどれくらい汚れているか、国民は知らない。薄々とは気づいている。主要なテレビ・新聞・雑誌も全部買収され、カネ(宣伝・広告費)の力で押さえ込まれている。
4. 責任者に正しく責任を取らせる構図を持たない国、それが今の日本である。あるべき姿は、国民の代表者(選挙で選ばれた者)たちに本当の権限(権力)を持たせることだ。そのことを小沢一郎はずっと言ってきた。「官僚主導をやめて、政治主導にする」「国民の生活が一番」という小沢一郎のスローガンが偉い。官僚たちから権限を奪いとって、彼らをただの事務公務員にたたき落とさなければいけない。代表者たちが正しく責任を取れる仕組みを作れ。代表者が間違ったことをやって国民に大変な被害が出てきた時は、代表者たちを牢屋に入れる。それくらいの国家体制ができなければならない。指導者たちに、名誉と信頼と尊敬を与えなければ、彼らは責任の取り方を知らなくなる。日本国には国家主権ソブリーニティ(sovereignty)なんてものはないに等しい。それが属国だ。自分たちの運命を自分たちで決める、自覚して国民が自分たちの代表を選んで、その代表たちからなる政府を作るために、政治改革をやるのだ。そしてそのことが、アメリカからの部分的な序々の独立なのだ。私はずっとこう主張してきた。

P243 ~ 244

[コメント]

「英文法の謎を解く」以来の副島先生の熱心な読者の一人として、小沢一郎氏についての考え以外はすべてよく理解できる。ただ、現実はどうするかが問題と思う。

